荒川の鳥たち

～荒川（足立区流域）野鳥調査１０年の記録～

足立・自然にふれあう会

はじめに

私たち「足立・自然にふれあう会（愛称『あしだち』）」は、野鳥観察を楽しみながら、地元荒川の野鳥生息状況を調査してきました。

この調査報告書は、その10年目をひとくぎりに、まとめたものです。

一回ごとの調査を一つの点と、あるいは一本の棒と考えて結んでみると、点は線になり、棒は列になります。そして変化する姿が見えてきます、それもまた後には10年の点、10年の棒になってしまうにしても。

これまで足立区内の荒川流域についてこのような調査がまとめられた様子はありません。私たちの調査以前の記録がないとすれば、この報告書は貴重な資料になるはずです。

9kmほどの調査域は、足立区全域の10％を占める区内最大の広大な連続空間です。

1955年頃の河川敷は、荒れ地と食料確保のための農地でした。その後、都市の近代化は河川敷にも及び、グランドや公園にと整備され、市民の憩いの場所にかわりました。また当然のことながら、地震や水害などから都民の生命・財産・文化を守るための防護堰堤という本来の目的の強化工事も行われていて、これも手付かずの自然とは違う都市河川の宿命でしょう。

鳥も含めて野生生物は、自ら生きる環境を作ることはできず、そこにある環境をただただ選ぶだけの立場でしかありません。生きられるように、変わる厳しい環境に耐え、体を変化させて生き延びてきたのです。霊長目ヒト科ヒトも例外ではなかったはずです。そのヒトが己の都合のみで環境を変え、地球全体の生物存亡の危機を生み出してしまいました。

私たちに出来ることは本当に小さな、小さなことです。長い目でみれば点や棒にしかすぎない10年間の野鳥調査報告書ですが、それでも私たちは今、表れた曲線や棒の高低を共通の認識として受け止め、環境の変化を見つめ続けたいと思います。

そして、次の点を打つべく、棒を立てるべく、私たちは新たな調査へと動き出しました。

これまで長期にわたり、調査に参加し、見守り、支えてくださった方々に感謝し、誌面を借りてお礼を申上げます。

2009年1月　　足立・自然にふれあう会会長　村澤嘉信

発刊に寄せて

日本野鳥の会の呼びかけに応じて行ったガン・カモ調査がきっかけとなり、地元である足立区の野鳥の実態を記録しようと始まったこの荒川野鳥調査が、思いがけず10年もの間続けることができ、ここにとりまとめの冊子を発刊するに至りました。提案した者のひとりとして望外の喜びであり、長い間調査を続けて下さった会員の皆様のご努力と情熱に深く感謝申し上げるとともに、この調査記録が野鳥の保護への一助となれば幸いと存じます。

足立・自然にふれあう会初代会長　吉田　博

表紙写真：西新井橋より上流を望む（photo:宮坂 昇）